

早稲田社会学会ニュース 第34号

2009年12月7日発行

早稲田社会学会事務局

〒162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1

早稲田大学文学部 社会学研究室内

Tel: 03-5286-3742

E-mail: socio-office@list.waseda.jp

URL: <http://www.waseda.jp/assoc-wss/>

今回のニュースの内容

1. 第61回早稲田社会学会大会報告
2. 早稲田社会学会総会報告
3. 研究例会報告
4. 2008年度研究助成報告
5. 2009年度研究助成について
6. 入退会者のお知らせ
7. 学会費納入のお願い

1. 第61回早稲田社会学会大会の報告

第61回早稲田社会学会大会は、2009年7月4日(土)、早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス)34号館453教室において開催されました。報告者および報告題目、司会者、討論者は次のとおりです。

一般報告

司会者：河野 憲一(早稲田大学) 麦倉 泰子(関東学院大学)

報告者および題目：

赤田 達也(早稲田大学社会科学部研究科)：大学院受験予備校から見た学歴信仰の癒しと救いに関する社会学的考察 学歴ロンダリング希望者の動向を中心に

平野 直子(早稲田大学文学部研究科)：手当て療法「レイキ」の80年史 民間療法と脱ノ超「近代」の言説

熱田 敬子(早稲田大学文学部研究科)：「決定」と「責任」はなぜ結びつくのか 個人化時代の中絶の語られ方

大貫 恵佳(駒沢女子大学)：ミシェル・フーコーと構造主義

シンポジウム

テーマ：「若者をめぐる困難」

報告者および題目：

浅野 智彦(東京学芸大学)：若者論の20年をふりかえって

本田 由紀(東京大学)：社会の構造変化と若者

大隈 俊弥(厚生労働省職業安定局)：若年者雇用対策の展開

討論者：小島 宏(早稲田大学) 園田 茂人(東京大学)

司会者：木村 好美(早稲田大学)

2. 早稲田社会学会総会の報告

2009年7月4日、大会に引き続いて開催された総会において以下の事項が報告されました。

- 1) 理事会および研究活動委員会、編集委員会の活動報告(2008年7月～2009年7月)
- 2) 2008年度研究助成の申請と採用の経過について

また、同総会において以下の議案が提案され、慎重な審議の結果、すべて原案どおり可決されました。

- 1) 2008年度決算案の審議と承認(同封の決算報告をご参照ください)
- 2) 2009年度予算案の審議と承認(同封の予算報告をご参照ください)

3. 研究例会の報告

第30回研究例会(2009年度第1回)が、以下のとおり開催されました。

第30回研究例会

日時: 2009年5月23日(土) 14:00-17:00

会場: 早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス)36号館681教室

司会者: 池田祥英(早稲田大学)

テーマ: 「大学生の就職活動 一文生の就職活動調査より」

報告者および題目:

西尾昌樹(早稲田大学キャリアセンター): 大学生の就職状況をめぐって

岡口瞳美、久我龍太郎(早稲田大学文学部学生): 一文生の進路と就職活動

原科達也(早稲田大学大学院): 大学生活の過ごし方と就職活動

関水徹平(早稲田大学): 家族と進路 家庭環境は進路決定にどのような影響を及ぼすのか

<研究例会報告>

今回の研究例会では、シンポジウムのテーマである「若者をめぐる困難」に関連して、大学生にとって最大の困難のひとつである就職活動に着目し、早稲田大学の学生の現状を中心に報告がおこなわれた。

まず、キャリアセンターの西尾昌樹氏から、現在の早稲田大学の就職状況や大卒者求人倍率の動向などについて説明があった。数字だけを見ると、2008年度に就職活動を行った学生たちは、いわゆる「氷河期」の学生ほど厳しい状況におかれているわけではない。しかしながら、学生の相談事例を見てみると、やはり困難に陥ってしまう学生がかなりいることがわかる。その背景には、応募の自由化やインターネットを利用したエントリーの普及が進んだこと、企業から求められる能力が多様化していることなどが考えられる。さらに、昨年度における急激な景気の冷え込みに伴って社会問題化した「内定取り消し」の事案が早稲田大学においても発生していることが報告された。

引き続き、昨年度文学部社会学コース2年次の社会学演習1・2の一環として行われた「大学生活と就職に関する調査」(2009年3月に早稲田大学第一文学部を卒業予定の学生全員を対象)に関係する三つの報告がおこなわれた。岡口瞳美氏と久我龍太郎氏は、調査の概要を示したうえで、第一文学部生の就職活動の特性について、企業説明会やインターンシップへの参加度、内定数および内定時期、就職予定先の業種などを示した。さらに、9割以上の回答者が早稲田大学出身であることが就職において有利に働いたと考えているのに対して、第一文学部出身であることについては、有利であるとする者が約3割、不利であるとする者が約4割と意見が分かれているという興味深い結果が報告された。

原科達也氏は、今回の調査結果でも支持された授業や卒論などへの熱心度と内定獲得量が負の相関にあるという仮説を否定し、両者の間に就職活動量が関与しているのではないかと考えた。つまり、授業や卒論に

熱心に取り組むことで就職活動に振り向ける労力・時間が少なくなり、それが内定獲得量の低下につながるのではないかと、ということである。これを立証するために、就職活動量として「企業説明会の参加回数」「エントリーシート提出企業数」を挙げ、それらが「卒論、研究への熱心度」「授業への熱心度」「サークルへの熱心度」「友人関係への熱心度」などから受ける影響を検討した。その結果、原科氏の立てた仮説は支持されず、むしろサークル活動や友人関係、アルバイトなどが就職活動量と正の相関があることが明らかとなった。関水徹平氏は、家庭環境と進路決定について以下の5つの仮説を検証する。親の階層（学歴や職業的地位）が高いほど、子どもは（就職ではなく、大学院等への）「進学」を選びやすくなり、就職活動を有利に進めることができ、その家庭は高い文化資本を持つ。また、文化資本が高い家庭の者ほど「進学」の割合が高くなり、就職活動を有利に進めることができる。今回の調査結果からこれらの仮説を検証してみると、仮説①、②は支持されたが、仮説③については「内定社数」との相関が明白には示されず、仮説④に至っては、逆に文化資本が高い家庭に育った者ほど内定社数が少ないという負の相関を持つという結果となった。当日は今年度調査実習を行っている社会学コース2年生の諸君をはじめ、多くの参加者に恵まれ、活発な討論が行われた。西尾氏と岡口・久我氏に対しては、第一文学部生の就職活動の実態について質問がなされ、たとえば一口に「インターンシップ」と呼ばれているものでも実態は多様であることなどが明らかになった。一方、原科氏と関水氏に対しては分析の手続についての質問がなされた。

シンポジウムのテーマとの関連で言えば、今回の調査対象は一般の4年制大学の学生と比べてもさまざまな点で恵まれた層であり、時期的にも就職氷河期と比べるとかなり景気が回復し、しかも世界的金融危機に伴う景気悪化の影響を受ける前に就職活動を行っているので、数字だけを見るとそれほど「困難」な様子が現われているようには思われない。しかし、採用企業側が即戦力を求めるようになり、ハイパーメリトクラシー化（本田由紀）が進んでいるなかで、学生たちは際限なく増殖する就職情報の波に揉まれ、漠然とした不安にさいなまれている。これは内定獲得数という形では現われていないとはいえ、やはり現在の学生たちが共通に抱えている「困難」なのだろう。（研究活動委員 池田祥英）

4. 2008年度研究助成の報告

昨年度の研究助成の対象は、次の研究でした。

- 1) 研究題目：ミシェル・フーコーにおける「言表」と「可視性」
研究代表者：大貫 恵佳（早稲田大学総合研究機構文化社会研究所）
助成額：15万円
- 2) 研究題目：手当て療法「レイキ」の歴史的展開
研究代表者：平野 直子（早稲田大学大学院文学研究科 博士後期課程）
助成額：15万円

研究成果の概要として以下の報告書が提出されました。

ミシェル・フーコーにおける「言表」と「可視性」

大貫 恵佳（早稲田大学総合研究機構文化社会研究所）

本研究はミシェル・フーコーの理論を再読する試みである。これまで彼の議論は、大きく分けて2つの仕方を受容されてきたと言える。ひとつは、その諸概念を受容し、そこから諸理論を展開する仕方であるが、そこでは主としてフーコーの後期の仕事である権力論が重視される。もうひとつは、フーコー理論に登場する概念に依拠するのではなく、彼の方法論を受容し、言説分析によって歴史の再構築を図るものだが、ここでは前期から中期のフーコーの考古学が重視されている。これら両者は、たんに受容の問題としてではなく、フーコーに内在する非一貫性（もしくは矛盾）として捉えられ、互いに相容れないものとして論じられてき

た。

しかしながら彼の理論のなかには、考古学と権力論とを貫く共通の軸が存在している。それを最初に指摘したのは、ジル・ドゥルーズである。ドゥルーズは1986年にその軸を「可視性」と「言表」と表現していたが(Deleuze 1986 = 1987)、本研究ではそのドゥルーズの指摘に依拠しながら、フーコーの権力論を再解釈した。彼の権力論から、言葉の問題である法(言表可能なものの領野)と光やまなざしの問題である規律訓練のテクノロジー(可視的なものの領野)という2つの軸を抽出したのである。たとえば、囚人は、監獄において「まなざされ」、法において「判断」される(Foucault 1975 = 1977)。同様に、「性的なことがら」は、家族のなか、学校のなか、寄宿舎のなか、精神病院のなかで「まなざされ」、規範によって「判断」される(Foucault 1976 = 1986)。フーコーはここに「権力」を見出すわけであるが、同時にこの「言うこと」の次元にあるものと「見ること」の次元にあるものの不一致を強調している。

このふたつは、彼の考古学的手法の代表作ともいえる『言葉と物』(Foucault 1966 = 1974)における「言葉」と「物」に対応している。したがってこれらは、フーコーの理論を一貫したものとして読む可能性を開くものであるが、一方で、彼が考古学から権力論へと移行した(移行せざるを得なかった)理由を説明するものでもある。というのも、彼が「権力」論のなかで強調した「言うこと」と「見ること」のあいだにあるズレは、それまで従事してきた考古学の範囲では取り扱うことができなかったからである。本研究では、フーコーが構造主義(精神分析や文化人類学)ととり結んだ関係を整理することによって、考古学から権力論への彼の移行を理解する新しい視点を提示することができた。

【参考文献】

Deleuze, Gills, 1986, *Foucault*, Minit. (= 1987, 宇野邦一訳『フーコー』河出書房新社)

Foucault, Michel, 1966, *Les mots et les choses*, Gallimard. (= 1974, 渡辺一民・佐々木明訳『言葉と物 人文科学の考古学』新潮社.)

, 1975, *Surveiller et punir: Naissance de la prison*, Gallimard. (= 1977, 田村俣訳『監獄の誕生?? 監視と処罰』新潮社.)

手当て療法「レイキ」の歴史的展開

平野 直子(早稲田大学大学院文学研究科 博士後期課程)

「レイキ」とは、1922(大正11)年臼井甕男によって「霊気療法」として創始され、現在欧米を中心に世界で500万人(日本では15万人)が実践しているといわれる民間療法である。身体に「手を当てる」という行為によって「エネルギー(気・霊能)」の流れを整え、それによって心身の不調を改善するという。

「レイキ」は普及の中心となるような人物や組織を欠いていたにも関わらず、80年にわたり様々な時代や地域において存続し、今もその実践者は増え続けている。本研究は、これまで断片的にしか知られてこなかった「レイキ」の80年史と、それが提示する課題を明らかにすることを目的とする。

「レイキ」の誕生は、かつての「養生」や「衛生」にかわり「健康」という語が普及したことに代表されるような、明治末から大正期にかけての心身についての関心の変化と関係が深い。当時この変化に伴い「岡田式静坐法」等多くの「健康法」が誕生したが、1920~30年代になるとさらにその中から、「霊術」といわれる特殊な一群が現れた。「霊術」は当時の健康法に特徴的な操体法的技術や、仏教や道教など伝統宗教に由来する行法や理論、当時の哲学や医学・心理学から得た諸観念や用語等、当時得られた心身に関する知識・思想を手当たり次第に取り込み、統合しようとするものだった。その多くは、明治以来取り入れられた「近代」(=「西洋近代」)の科学技術や、それに裏づけられた社会制度(特に医療)や生活を、物質主義的で要素還元的であると否定的に捉え、精神と身体・物質と思想を統一的に捉える、より「高度」でより「進んだ」思想や方法を提案しようという試みであった。

「霊気療法」もこうした文脈の中で誕生したものであるが、臼井が早くに(1926年)死去したことや、主要メンバーの多くが海軍軍人だったことにより、日本においては戦後「霊気療法」は知られなくなっていった。その一方で、「霊気療法」はハワイの日系人社会に持ち込まれ、「REIKI」として1980年前後から「ニュ

「ニューエイジ」の実践者たちのなかで急速に広まった。「旧来の宗教や近代合理主義から霊性へ」という思潮の中で、「REIKI」は「東洋の古来の知恵」と見なされ、「近代合理主義」に基づく医療を代替するものと期待されたのである。1990 年前後には日本の「ニューエイジ」「精神世界」の実践者によって「再上陸」し、2000 年代の「スピリチュアル・ブーム」で「レイキ」を知る人は急速に拡大した。

「レイキ」を受け入れてきたのは、それぞれの時代・地域で「今・この社会」「近代的なるもの」に異を唱える人びとであった。その異議申し立ては、近代医療の「還元主義的な科学方法論」や「心身二元論的世界観」への批判といった大きな共通点を持つ一方、乗り越えるべき「今・この社会」の像は多様である。「レイキ」を通してこの「異議申し立て」の諸相をみることで、モダニティの「普遍性」とそれに対峙する「個別性」のダイナミズムを明らかにしていくことが、今後の課題である。

5. 2009 年度研究助成について

2009 年度の研究助成の募集に対して 1 件の申請があり、2009 年 7 月 4 日の理事会で審査した結果、以下のとおり助成が決定されました。

2009 年度研究助成

- 1) 研究題目：リベラルな政治文化の形成 公共圏形成の資源の所在
研究代表者：原科 達也（早稲田大学大学院文学研究科 博士後期課程）
助成額： 15 万円

6. 入退会者のお知らせ

理事会において以下 4 名の入会が承認されました。（以下、敬称略）

2009 年 5 月 23 日理事会

- 大窪 彬夫（早大大学院社会科学研究科修士課程）
大塚 翔（早大大学院社会科学研究科修士課程）
施 瑜（早大大学院文学研究科社会学コース博士後期課程）

2008 年 7 月 4 日理事会

- 柳原 良江（東京大学大学院人文科学研究科グローバル COE プログラム研究員）

また、理事会において以下 4 名の退会が承認されました。（以下、敬称略）

2009 年 5 月 24 日理事会

- 岡田 素之 濱島 光
平峰 恵利花 遊 みか

7. 学会費納入のお願い

本年度の学会費が未納の方、および過年度分の未納がある方宛てに、振り込み用紙（お名前と該当の未納年度を印字しております）を同封いたします。早急にお振り込みくださいますようお願い申し上げます。なお、本状と入れ違いになりました節はご容赦ください。

- 口座番号：00100-3-38020（郵便振替）
加入者名：早稲田社会学会
（年会費：一般会員 5,000 円 学生会員 3,000 円）

複数年度分の会費を納入される場合、および転居・異動などがあった場合には、通信欄にその旨を明記ください。

会費を3年以上滞納されますと、2000年7月8日の総会決議および2000年12月16日の理事会決議にもとづき、会員資格の一部が停止されます(次の3つの権利が失われます。学会大会で報告すること『社会学年誌』へ投稿すること『社会学年誌』の配布を受けること)のでご注意ください。

2000年12月16日の理事会決議にもとづき、事務局では「未納会費の一部が納入された場合には、1997年度以降の最も古い年度の未納分から優先的に充当」する処理をとっております。したがって、本年4月以降にお振り込みいただいた会費が、本年度(2009年度)分ではなく、過年度の未納分として充当されている場合もあります。ご了承ください。なお、年会費の納入記録についてのお問い合わせなどがありましたら、事務局(socio-office@list.waseda.jp)までご連絡ください。

なお、2009年9月から、事務局幹事が平野直子より関水徹平に交代となりましたのでご報告申し上げます。引き続き、どうぞよろしくお願い申し上げます。

以上